

三井文庫での二年間

石 井 寛 治

一九八二年四月から八四年三月までの二年間、私は当時の館長安藤良雄先生のご厚意により、嘱託研究員として週一回ずつ三井文庫へ通い研究に従事する機会を与えられた。義務といえ、二年目に論文を一本『三井文庫論叢』に書くことだけで、あとはなんの拘束もなく、自由に史料を読ませてもらい、書庫への出入まで許されたのであるから、これ程恵まれた機会は滅多に得られるものではない。

毎週木曜日を文庫へ通う日と決めていた私は、朝早くからいそいそと文庫へ通い……というのはウソで、実際は十一時頃にやっと文庫へ到着し、着くとすぐにお昼の中華ソバを注文してもらってから仕事にとりかかるのを常とした。昼食と三時のお茶の休みをはさんで、夕方五時近くまでの仕事であるから、史料を探し出して筆写する時間は知れたものである。だが、そうした短時間の仕事を通じてほとんど毎回のように、なんらかの新発見の喜びを味わうことができた。休憩時のたびに、私は、専任研究員の鈴木邦夫君らをつかまえては、小ささまざまな新発見について、とくとくとしゃ

べったものである。鈴木君たちには、きっと迷惑なことだったと思うが、新発見の史実をもとに構想した仮説をあれこれと繰り返しているうちに、初めのうちはぼんやりしていた明治初年の三井組のイメージが、しだいにはつきりとした輪郭を帯びるようになった。

誤解のないように記しておく、私が筆写して論文に利用した史料は、一点を除いてすべて公開され目録に記されている史料である。書庫への立入りは、史料を引き出す時間の節約に役立つとはいえ、それはあらかじめ目録を調べた上でのものであり、目録なくしては、書庫へ入ってもどこから史料を引き出したらよいか見当がつかないのである。その意味では、文庫を利用する研究者としての一番の希望は、いまの諸目録をさらに整理し統合して見易くするとともに、できれば印刷して全国の大学・研究機関に配っていただくことである。そうなれば、三井文庫の利用価値は何倍にも増えることであろう。

さて、三井文庫へ二年間通ってみて痛感したことは、公開されながら誰も利用してこなかった貴重な史料が、まだまだ沢山あるという事実である。一例をあげれば、明治七年の官金抵当増額令に対処するために、三井組がオリエンタル銀行横浜支店から巨額の融資を仰いだことは、いくつかの公開史料に明記されていたにもかかわらず、これまで誰一人としてそれに気付かなかった。たまたま『横浜市史』の編集に携わったことのある私は、三井組の横浜での活動に興味をもって、そこから調べ出したところ、横浜支店から東京本店へ向けて「ツチ印」と称する最高百万ドルもの送金が行なわれている事実を記した帳面を発見した。文庫へ通いはじめて間もない八二年五月六日のことである。「ツチ印」とはいったい何のことか？ 私がこの新発見の意味を休憩時に専任研究員の人々に尋ねてまわったことは言うまでもないが、誰も分らなかつた。そこで、明治七・八年当時の史料を片端しから当たったところ、六月二十四日になって、横浜のオリエンタル銀行から三井組が百万ドルを借用していた史料（これも公開史料）を発見した。この融資こそが、あの抵

当増額令発布にさいして、小野組・島田組が倒産したにもかかわらず、ひとり三井組のみが延命しえた秘密ではあるまいか？ 私はこの仮説を裏付けるべく、さらに関連史料を探し続けた。「ツチ印」とオリエンタル銀行融資の関連がつかめれば、右の仮説は、帳簿上の裏付けを得たことになる。だが、その点を示す史料はなかなか見付からなかった。ようやく、十一月十八日になって、読んでいたある史料の末尾のメモ書きに、「土印預リヲ大元方預リト改メル」とあるのを見付け、これが謎解きの手掛りとなった。「土」という文字は「十一」と読むことができ、横浜で「十一」といえば、居留地十一番館すなわちオリエンタル銀行横浜支店を指すことに気付いたからである。この時以降、私は先の仮説に自信を得て、しばらくの間は休憩時に外国銀行のことばかりしゃべっていたように思う。

この仮説が正しいとなると、当時の三井組の業態は、決して最新の経営史的研究が主張するような堅実なものだったとは言えないはずである。そこで、次の作業は、当時の三井組の業態の全面的見直しということになった。これについても、明治七・八年の目録を当り直して史料をみていった結果、従来全く利用されてこなかった店舗別貸付先リストを公開史料の中から発見することができた。そうした分析へと手を広げていくうちに、約束の二年間はみるみるうちに過ぎ去り、一七号に載せていただいた論文は、尻切れトンボに終わってしまった。しかし、三井銀行創設前後の三井組が、通説とは正反対に、累積した不良貸で破綻寸前であったという同論文の主張が正しいとすれば、その後の三井財閥研究も抜本的な見直しが必要となるはずである。その作業は、私の指導する東大大学院生粕谷誠君の手によっていま進められつつあり、明治十年代の三井銀行の経営や、二十年代の中上川改革の評価も大幅に変更されることになりそうである。私もまた、機会があれば、三井財閥史の書き直しの作業にさらに加わりたいと願っている。戦前の日本経済の中核を担った三井財閥の歴史が書き直されるとなれば、それは当時の日本経済全体のイメージの改訂にもつながることになるであろう。

以上、私のつたない体験に基づいて、三井文庫がいかに素晴らしい史料を豊富に所蔵しているかを述べてきた。歴史は繰り返し書き直されるものだ、とよく言われる。歴史の見方が変わるにつれて確かにそういうことがある。しかし、それが歴史学の名において行なわれる場合には、新しい史料の発見と提示を伴わなければならないであろう。これまで事実だと思われてきたことのいかに多くが、根拠のない虚構にすぎなかったか、そのことを確実な史料に基づいて明らかにすることが、歴史学の発展を支える基礎作業である。だが、それをなすうるだけの信頼できる企業史料は、日本では決して十分に提供されてきたとはいえない。そうした状況の中で、三井文庫は、日本経済の歴史の真相をわれわれに開示する第一級史料をもっとも多く所蔵し公開してきたといつてよい。このことは、同じ旧財閥でも三菱や住友の場合の史料公開の度合が、情なくなる程貧弱であるのと比較すれば、一目瞭然であろう。残念ながら、日本は、近代企業史料の保存と公開の程度において、先進諸国中ももっとも遅れた国ではないかと思う。これまで門外不出であったイギリス・ロスチャイルド商会の史料が公開されはじめ、アメリカ・モルガン商会の内部史料も公開されはじめた今日、日本の有力企業の史料公開の点で世界に誇ることができるのは、唯一つ三井文庫のみであるといつても過言ではない。そうした三井文庫が、現館長山口和雄先生以下館員諸氏のご努力と、それを支える三井系企業の理解ある援助とによって、今後ますます歴史研究の宝庫としての役割を果たしてゆき、他の企業（集団）の模範となつて下さることを心から期待するものである。